
タラウド語使用地域の言語使用と言語意識

— インドネシア国、北スラウェシ州における民族語使用実態 —

内海 敦子*

要 旨

インドネシア国、北スラウェシ州には全部で 11 の民族語が話されているが、それぞれの言語の話者は 1 万人から 4 万人と報告されている。そのうち、フィリピンのミンダナオ島に最も近いタラウド (Talaud) 諸島で話されている言語がタラウド語である。大きく分けると六つの方言に分かれるとされる。本論文ではタラウド諸島サリバブ島において社会言語学的調査を行った結果得られたデータを基に、タラウド語話者が、インドネシア語標準変種、インドネシア語マナド方言とタラウド語をどのように使い分けているかを報告する。

1. インドネシアで使用されている言語の概要

1.1. 国家語、地域共通語、民族語

インドネシア国は独立後、国家語としてインドネシア語を制定した。インドネシア語の母体となった「標準マレイス」は、オランダ支配下において、地方の役人が使用する言語であったので、限られた範囲ではあるが、全国的に使用されてはいた。しかし、オランダ政府がインドネシア国民（その当時はオランダ領東インド）の民族を超えた団結を嫌ったことと、初等教育の不徹底によって、あまり普及しなかった。その後の日本軍占領時代に初等教育において普及が試みられ、これが独立後の国家語としての指定につながった。この経緯は森山 2009 に詳しく述べられている。

インドネシア語の標準変種はシュリーヴィジャヤ王朝で用いられていた書き言葉の伝統を持つ書記言語であり、政府機関、放送、教育、宗教儀式で主に使われる言語である。これに対し、インドネシア語の口語変種は通商言語として用いられた歴史を持ち、ピジンとして用いられてきた。それらの口語変種は地域ごとに様々な特徴を持ち、中にはクレオール化したものもある。

インドネシア国で用いられている「インドネシア語」には、大きく分けて、インドネシア語標準変種 (Bahasa Indonesia yang baik dan benar) と、通商言語や地域共通語として用いられる口語変種の二種類があることに注意する必要がある。

二億五千万人前後の人口を抱えるインドネシアは、大小合わせて 1200 を超える島から成り、上記の「インドネシア語」のほかに、現在 719 の言語が話されているとされる (SIL

International)。スラウェシ島にも多くの言語が存在する。インドネシア政府は、民族間の対立や、特定の民族が独立を唱えることを防ぐため、民族意識を抑えたいという強い意向を持ち、これらの民族語は「地方語 (Bahasa Daerah)」と呼び習わしてきたし、民族語の使用を抑圧する政策をとってきた。

このため、多数の話者を擁する民族語は活発に使用され続けてきたものの、少数の話者しか持たない民族語の中には子供への伝達が行われなくなり、絶滅の危機に瀕しているものもある。北スラウェシ州には、まさにそのような言語が多数存在している。

本稿では、内海2010と同様、民族独自の言語を「民族語」と呼び、通商目的を中心として地域のコミュニケーションにおいて用いられている言語を「地域共通語」と呼ぶ。

1.2. 北スラウェシ州の多言語状況と人々の移動

北スラウェシ州は、ミナハサ (Minahasa) 半島 (別名北スラウェシ半島) の東半分を占めているが、この州だけで11の言語が話されている。これらは話者数1万人から4万人と推定されている少数民族言語である。民族語話者の総計は推定で30万人程度である。

ただし、北スラウェシ州の人口はこれらの少数民族語話者の合計よりもはるかに多い。州都のマナド市だけで、42万人を超え全州で200万人を超える。他州からの流入者が多く移住しているからである。また、職業や教育の機会を求めて、州内での人々の行き来も活発である。このような人々の移動により、元々一つの言語を話す民族が固まって住んでいた地域は少なくなり、多くの場所で様々な言語の話者が入り混じって住むようになった。そのような場所では当然のことながら民族語だけで生活することはなく、地域共通語たるインドネシア語の口語変種の一つ、マナド方言が活発に用いられることになる。

なお、北スラウェシ州はオランダの影響が強い地域であり、元々住んでいた少数民族の人々は主にプロテスタントである。他州から流入する人々にはイスラーム信仰者が圧倒的に多い。

1.3. 北スラウェシ州における言語変種のレジスター

インドネシアの国家語であり、書記言語および政府、放送、教育、公的機関で用いられるインドネシア語標準変種は、教育により習得されるもので、主に改まった場で用いられるH変種である。

インドネシア語の口語変種は、日常会話で触れることにより習得されるもので、改まった場以外で用いられるL変種である。北スラウェシ州のマナド方言もL変種としてよい。

北スラウェシ州の各民族語は書き言葉としての伝統を持たず、アルファベットにより文字化されているものは聖書や研究者によって書かれた民話などに限られている。宗教儀式などにおいて、用いられることはあるものの、その使用は限定されている。例えば、事務的な連絡はインドネシア語標準変種で行われ、特定の人物 (高齢層) の説教や特定の賛美歌を民族語で行うといった具合である。権威が低いとは言えないものの、実際に使用範囲を観察する限り、家庭や友人間、近隣で用いられることがほとんどで、改まった場では用いられず、書き言葉を持たないことから、L変種とすべきである。ただし、インドネシアの他の地域 (ジャワ島やバリ島など) では書記言語の伝統を持ち、権威の高い民族語も存在し、H変種

に分類されるものもある。

以上をまとめると、インドネシア語標準変種がH変種、インドネシア語の口語変種マナド方言がL変種、北スラウェシ州の民族語もL変種である。つまり、北スラウェシ州においてはマナド方言と民族語がL変種となり、競合関係にあると言える。大勢を語るならば、高齢層はL変種として民族語を好んで用いるのに対し、若年層がL変種として用いるのはほぼマナド方言である。

2. タラウド語の話されている地域と方言

2.1. タラウド語とその方言

タラウド語 (Talaud) は、その話者によって bisara n-tarodda と呼ばれている。bisara は言語という意味で、tarodda が地域名である¹⁾。スラウェシ島北部のミナハサ半島 (北スラウェシ半島とも呼ばれる) から 100 キロ以上北上したところにある。1000 キロ平方強で 8 万 5 千人から 9 万人ほどの人口を抱える。タラウド諸島の人口はこの 20 年ほどで倍増しており、自然増とは考えにくい。元からの住民数に匹敵する他地域からの移民があったと考えるのが妥当である。事実、サギル諸島 (タラウド諸島に近接する群島で同じく北スラウェシ州に属する) やマカッサル (スラウェシ島南部) からの移民はリルン市やメロンワネ市において大変よく見られる²⁾。タラウド語話者の数は Noorduyn 1991 に 30,000 人とあるが、現在においても、タラウド民族の数に関して言えば、この数からあまり変わっていないと考えられる。ただし、高齢層は流暢に話せる一方、中年層以下の流暢な話者は減少しているので、第一言語話者としての流暢な話者の数は、これよりもずっと少ないことも考えられる。

タラウド語は大きく分けて六つの方言があるとされる。第一に、聖書の翻訳もなされたサリバブ方言である³⁾。第二にカバルアン島 (Kabaruan) において話されているカバルアン方言である。第三にニアムパック (Nyiampak) 方言、第四にベオ (Beo) 方言、第五にエサン (Esang) 方言がある。この三変種はタラウド諸島最大の島、カラケラン島において話されている⁴⁾。第六がナヌサ (Nanusa) 方言である⁵⁾。本論文での調査対象となった話者はほぼサリバブ方言の話者で、少数ナヌサ方言の話者も含まれる。

2.2. タラウド語話者

タラウド語話者は、ほぼ全員がキリスト教プロテスタントの信者であり、多くの人が毎週日曜には教会に通う。その他、毎週一回、地域によって分けられた 20 世帯ほどの信者のグループが各家を回りもちで開くイバダ (ibadah「宗教儀式」) の会を持つことが多い。

いくつかの教会においては、月に一回、タラウド語による説教と賛美歌を歌う会を持つことを決めている。いくつかの信者グループにおいてもイバダをタラウド語で行うことがある。しかし、ほとんどの場合は教会で用いられる言語はインドネシア語の標準変種であり、タラウド語の聖書や賛美歌を用いることはあっても、インドネシア語標準変種の対訳が必要とされることが多い。

その他、結婚式や進水式などではタラウド語による伝統的な祝辞、葬式においては弔辞がよまれることがあるが、これはすべて暗記されて伝わっており、書記言語による記録はほと

んどない。また、完全に暗記しているのは高齢層の話者で若者への伝達が活発でないため、徐々に失われている。若年層はタラウド語による祝辞や弔辞は必要不可欠なわけではなく、インドネシア語標準変種によるキリスト教の宗教的説示で十分だと考えているようだ。

北スラウェシ州の州都マナド市からは遠く隔たっているにも関わらず、マナド方言が広まっており、若年層はほぼこのマナド方言を第一言語とし、L変種として用いている。高齢層は高齢層同士ではタラウド語、若年層や他地域の人々に対してはマナド方言をL変種として用いる。インドネシア語標準変種は全ての人々にとってH変種としてよい。

タラウド諸島は、この20年人口が移民によって倍増しているものの、今回の調査票で調べた限りでは、どの年齢層をとっても、タラウド人の両親を持ち、タラウド人の配偶者を持つ人が圧倒的に多かった⁶⁾。高齢層（1959年以前生）では17人のうち両親ともタラウド人が16名であった。1名は母親がサギル人である。配偶者に関しても15名がタラウド人であり、2名がサギル人であった。高齢層の配偶者に関するデータと相関するが、若年層の両親も27名中、24名がタラウド人であり、1名がサギル人の父親（とタラウド人の母親）、2名がサギル人の母親（とタラウド人の父親）を持っている。つまり、タラウド人同士の結婚はまだよくあるということである。若年層（1965年以降生）の配偶者を見ても、27名中、タラウド人以外と結婚しているのは3名のみである。

なお、自らがどの民族に属すると認識するかに関して述べておく。北スラウェシにおいて、自らをある民族と認識するためには次の二つの条件を満たす必要がある。第一に「親のうち少なくとも一方が当該民族である」こと、第二に「伝統的に当該民族が居住してきた地域に住んでいること」である。父系か母系かは問わない⁷⁾。

3. 本論文で考察を加えたデータの説明

著者は2003年2月より、タラウド諸島（Talaud）、サリバブ島（Salibabu）の中心となる町、リルン市（Lirung）において、タラウド語の調査を進めてきた。リルン市および、隣に接するカラケラン島（Kalakerang）メロンワネ市（Melonguane）周辺において話されるサリバブ方言は、現存する唯一の聖書の翻訳に用いられた方言である。本論文の基となった調査はリルン方言の話者であるリルン市およびメロンワネ市の住民を主に対象としている。

その他に、有人の四つの島を含む最北に位置するナヌサ諸島（Nanusa）⁸⁾で話されているナヌサ方言の話者のうち、筆者の調査中にリルン市を訪れた人々も対象としている。

北スラウェシ州では、インドネシア語の口語変種、マナド方言が勢力を持っており若年層を中心として使用範囲を広げている。本研究では、調査対象となった話者たちをマナド方言とタラウド語の使用の割合の特徴から、1959年以前生まれの高齢層、1960年から1965年までに生まれた中年層、1965年以降1982年までに生まれた若年層の三つのグループに分類した。高齢層は17人、中年層は11人、若年層は27名の協力を得た。調査票にはアンケート回答者の情報を聞くものが12項目、言語使用状況と言語に対する態度を聞くものが45項目ある。アンケート回答者自身の情報は、「年齢」「性別」「学歴」「職業」「両親の民族」「配偶者の民族」などを聞いた。言語使用状況と言語態度に関する質問は、「一番得意な言語」「一番よく使う言語」「市場で用いる言語」「学校の授業で使う言語」「Talaud語が好きか」

「Talaud 語が将来にわたって用いられ続けると思うか」などである。調査項目は内海 2010 とほぼ同じで、「Bantik 語」を「Talaud 語」に変えただけである。これらの項目の多くの部分は同じ北スラウェシ州でトンサワン語の言語使用状況に関する大規模な社会言語学的調査を行った平林 2003 に準じている。その他、Quakenbush 2009 も参考にし、主に言語意識に関するいくつかの項目を取り入れた。

大まかに言って、高齢層は流暢なタラウド語の話者であることが多く、タラウド語を第一言語としている。中年層はタラウド語を話すことはできるものの、マナド方言が第一言語になっていることが多く、日常生活でもマナド方言あるいはインドネシア語を多く用いる。若年層はマナド方言を第一言語とし、マナド方言とインドネシア語を中心に用いており、タラウド語の能力は低い。

第5節以下では、2008年にリルン市とメロンワネ市でインドネシア語による社会言語学的調査票を住民に配布し、記入してもらった結果を基に、タラウド語話者の言語使用実態を記し考察を加えた⁹⁾。

4. データに関する注意点

次節以下ではアンケートのデータを、それぞれの言語使用領域に分けて示す。以下、内海 2010 で採用したのと同じ考え方で、同じように分析している。筆者は言語が継続して使用されるために重要な領域は第一に家庭、第二に教育現場であると考え。家庭では生活に密着した言語で限定コードを用い、教育現場では抽象的な思考に用いる言語を含む複雑で多くの話題を表現できる言語で精密コードを用いる。Talaud 語話者が暮らす環境においては、第二の教育現場において使用される精密コードはインドネシア語標準変種に限られ、教育現場で用いられる媒介言語はマナド方言あるいはマナド方言とインドネシア語標準変種の mixed code である。従って、Talaud 語の使用領域に関して一番重要なのが家庭ということになる。

以下では「家庭」「自然な発話時に用いる言語」「近隣の人々（タラウド人）に対して」「友人関係」「経済圏（買い物圏）」「公的な領域、改まった場」などに分けて各年代のデータを提示する。タラウド語、マナド方言、インドネシア語標準変種の他に、タラウド語とマナド方言の mixed code の四つから、それぞれの領域で使用する言語変種を選んでもらった。実際の言語使用を観察すると、タラウド語の会話にマナド方言が混ざらないことはほとんどない。高齢層は大半がタラウド語という会話を続けることができるが、特に中年層以下の世代ではマナド方言を混ぜないと話せない人も多い。従って、mixed code の選択肢を入れないと、言語使用の実態がつかめないと判断したからである。なお、このように mixed code を選択肢に入れたのは同じく北スラウェシ州で話されているトンサワン（Tonsawan）族の言語使用状況を詳細に調査した平林 2003 を参考にした。

以下の表中の BT はタラウド語（Bahasa Talaud）、BM はマナド方言（Bahasa Manado）、BI はインドネシア語標準変種（Bahasa Indonesia）、Cam はタラウド語とマナド方言の混ざったもの（Campuran antara bahasa Talaud dan Bahasa Manado）の略である。各年齢層は十数人から 30 人弱の少ないデータであるのであまり適当ではないが、回答した数を母集

団とし、その母集団に対する割合をパーセンテージで括弧内に示した。その上で、過半数が選択した言語を太字で強調して示した。選択された言語が30%位から50%程度と拮抗している場合はそれらの言語を網掛けにして示した。

以下のデータは、正確に言えば、話者が「どの言語変種を使用していると思っているか」を表している。筆者の観察から言えば、タラウド語話者がタラウド語を話していると思っているときでも、いくつかのマナド方言の単語が混ざっているものである。タラウド語とマナド方言の mixed code と話者が認識している場合、ほとんどの場合、マナド方言主体のところどころタラウド語の語彙が混ざっている程度だと考えてよい。したがって、タラウド語を選択した場合のみがタラウド語の構造を保持した言葉を話していると考えてよい。

5. 調査結果と考察

5.1. 私的領域：生まれ育った家庭における言語使用

以下の表1は、タラウド語、マナド方言、インドネシア語標準変種、タラウド語・マナド方言 mixed code の四変種のうち、年代ごとに「自分が生まれ育った家庭において、どの変種を誰に対して用いるか」に関するデータを示したものである。太字の部分が大部分の話者が選択する言語である。どの年齢層も父親、母親に対してタラウド語を用いている。しかし、兄弟に対して用いる言語に関しては、高齢層と中年層が主にタラウド語を使用しているのに対し、若年層は mixed code、つまりタラウド語とマナド方言が入り混じった変種を用いている。ただし、タラウド語を使用すると答えたものも約3分の1の8人いることから、若年層であってもタラウド語を家庭で使用することがかなりあることが分かる。

表1 私的領域：家庭における言語使用

	高齢層 (17人) (1959年以前生)	中年層 (11人) (1959～1965年生)	若年層 (27人) (1965年以降生)
A. 父親に使う言語	BT 13人 (76%) BM 2人 (12%) BI 2人 (12%) Cam 2人 (12%)	BT 7人 (64%) BM 3人 (27%) BI 1人 (9%) Cam 3人 (27%)	BT 20人 (74%) BM 2人 (7%) BI 0人 (0%) Cam 5人 (19%)
B. 母親に使う言語	BT 14人 (82%) BM 1人 (6%) BI 0人 (0%) Cam 2人 (12%)	BT 7人 (64%) BM 0人 (15%) BI 1人 (9%) Cam 3人 (27%)	BT 18人 (67%) BM 2人 (7%) BI 1人 (4%) Cam 7人 (26%)
C. 兄弟に対して使う言語	BT 9人 (86%) BM 4人 (24%) BI 1人 (6%) Cam 3人 (18%)	BT 7人 (64%) BM 1人 (9%) BI 1人 (9%) Cam 2人 (18%)	BT 8人 (30%) BM 3人 (11%) BI 2人 (7%) Cam 14人 (52%)

5.2. 私的な領域：核家族における言語使用

次に、配偶者と子供といった、話者が新しく形成する家族内での言語使用についてみてみよう。

以下の表2のDは配偶者に対して使う言語を調べたものである。タラウド語を使用する者がほとんどである高齢層に対し、中年層はタラウド語と mixed code の使用がほぼ半々と

なり、若年層はmixed codeが半数を占め、残りがマナド方言、タラウド語、インドネシア語とばらけている。ここからは高齢層が同年代と日常的にタラウド語をしているが、一方で若くなるに従ってタラウド語の使用が減り、マナド方言の混入が目立ってくるのが分かる。

子供に対して用いる言語（質問E）に関しては、高齢層ではインドネシア語標準変種とmixed codeが半々である。同世代以上のものと話すときに比べ、子供世代に対して（高齢層の子供世代は1960年代から1980年代生まれが多い）タラウド語のみで会話することが極端に減っていることがうかがえる。中年層は、子供に対してマナド方言を使用すると回答したものとmixed codeを選択すると回答したものが半々で、タラウド語を使用すると解答したものがいない。高齢層では4人（約4分の1）がタラウド語を使用すると答えているので、ここでも年代の差が顕著である。若年層はタラウド語を使用すると答えたものが3人（11%）いるものの、mixed codeあるいはマナド方言を用いることが多い（合計70%）。

さて、言語態度の方はどうか。Fに挙げたように、高齢層の6割はタラウド語を「子供が最初に話せるようになってほしい言語」として挙げている。しかし、実際にはタラウド語のみで子供と会話している者は約4分の1なので、言語態度と言語使用が乖離していることが分かる。

これに対して、中年層と若年層はインドネシア語標準変種と解答するものが大半である。ただし、タラウド語を選択するものも若干名いる（若年層では7人（26%）、中年層では1人（9%））。サンプル数が少ないのではっきりしたことは言えないが、中年層よりも若年層の方がタラウド語を大事にしようとする意識があるのかもしれない。ただし、現実にタラウド語を子供に対して用いている人は中年層と若年層では非常に少なくなっているので、ここでも言語態度と実際の言語使用が一致していない。

注目すべきは、インドネシア語標準変種を重要視する人々の増加である。職業の選択や学業の成功にインドネシア語標準変種つまり「良くて正しい言語（bahasa yang baik dan benar）」である書記言語が必要だと感じるが増えているからであろう。実際、タラウド語は役に立たないと言う親世代（20代～40代）の人間は多い。

表2 私的領域：核家族における言語使用

	高齢層（17人） （1959年以前生）	中年層（11人） （1959～1965年生）	若年層（27人） （1966年以降生）
D. 配偶者に対して 使う言語	BT 10人（59%） BM 1人（6%） BI 1人（6%） Cam 2人（13%）	BT 5人（45%） BM 2人（12%） BI 0人（0%） Cam 4人（24%）	BT 4人（15%） BM 6人（22%） BI 2人（7%） Cam 12人（44%）
E. 自分の子供に対 して使う言語	BT 4人（24%） BM 3人（18%） BI 6人（35%） Cam 5人（29%） うち1名がBTと BIと2つを選択	BT 0人（0%） BM 5人（45%） BI 2人（12%） Cam 4人（36%）	BT 3人（11%） BM 7人（26%） BI 5人（19%） Cam 12人（44%）
F. 子供に最初に話 せるようになって 欲しい言語	BT 10人（59%） BM 3人（18%） BI 5人（29%） その他0人（0%）	BT 1人（9%） BM 1人（9%） BI 8人（73%） その他2人（18%）	BT 7人（26%） BM 3人（11%） BI 16人（59%） Cam 1人（4%）

5.3. 私的な領域：近隣の人々（タラウド人）、友人、知らない人に対して使う言語

表3のGの項目は、自分とは異なる世代のタラウド人と話すときの言語を選ぶものである。高齢層には年下の世代、中年層・若年層には年上の世代との場合を想定してもらった。高齢層と中年層は過半数がタラウド語を選択する。残りはmixed codeやマナド方言、インドネシア語標準変種、と様々であった。ただし、高齢層と中年層は同じタラウド人に対しては、タラウド語か、タラウド語が混じった変種を選ぼうとしていることは分かる。この項目については若年層も似た傾向を示しており、タラウド語とmixed codeが半々という結果であった。

Hの項目は、同年代のタラウド人に対する使用言語を問うものであるが、結果は上記Gの項目の結果とほぼ同じであった。つまり、高齢層と中年層は半数以上がタラウド語を選択するが、若年層は4割強にとどまっているという差はあるものの、同民族に対してはタラウド語か、もしくはmixed codeを使用する傾向がどの年齢層にも観察できる。

Iに挙げた項目は親しい友人と話すときに使用する言語変種である。高齢層のみはタラウド語を選ぶものが4割ほどおり、mixed codeが3割程度である。しかし、中年層と若年層はタラウド語を選ぶものが2割弱しかいない。中年層ではmixed codeとインドネシア語標準変種のどちらかを選ぶものが大体半数ずつである。若年層ではmixed codeを選ぶものが圧倒的に多く（6割程度）、マナド方言を選ぶものもそれなりにいる（26%）。

この質問項目で注目すべきは、「親しい友人」の民族である。というのは、各自が思い浮

表3 私的領域における言語使用：タラウド人に対して

	高齢層 (17人) (1959年以前生)	中年層 (11人) (1959～1965年生)	若年層 (27人) (1966年以降生)
G. タラウド人の年下 (高齢層)・年上 (中年・若年層) と話すとき	BT 9人 (53%) BM 2人 (12%) BI 1人 (6%) Cam 5人 (29%)	BT 7人 (64%) BM 0人 (0%) BI 2人 (18%) Cam 2人 (18%)	BT 12人 (44%) BM 1人 (4%) BI 0人 (0%) Cam 14人 (52%)
H. タラウド人の同年 代と話すとき	BT 11人 (65%) BM 1人 (6%) BI 3人 (18%) Cam 3人 (18%) (BTとBIの重複回 答2人)	BT 7人 (64%) BM 0人 (0%) BI 1人 (9%) Cam 3人 (27%)	BT 11人 (40%) BM 3人 (11%) BI 1人 (4%) Cam 13人 (48%)
I. 親しい友人と話す ときに使う言語	BT 7人 (41%) BM 3人 (18%) BI 2人 (12%) Cam 5人 (29%)	BT 2人 (18%) BM 0人 (0%) BI 4人 (36%) Cam 5人 (45%)	BT 5人 (19%) BM 7人 (26%) BI 0人 (0%) Cam 16人 (59%) (BTとBMの重複回 答1人)
J. 知らない人と話す ときに使う言語	BT 0人 (0%) BM 2人 (12%) BI 14人 (82%) Cam 1人 (6%) (BMとBIの重複回 答1人)	BT 0人 (0%) BM 2人 (18%) BI 8人 (73%) Cam 1人 (9%)	BT 0人 (0%) BM 7人 (26%) BI 17人 (63%) Cam 3人 (11%)

かべた「親しい友人」の民族によって、使用言語が選ばれているからである。中年層や若年層でインドネシア語標準変種やマナド方言を選んだものは、「親しい友人」の中に他民族の友人がいたことが影響しているのかもしれない。

さて、表3に挙げた最後の項目Jについて述べる。知らない人と私的な領域で会ったときに選択する言語であるが、ここでは年代によって著しい差は見られない。どの年代でもタラウド語を選択する人は皆無であるが、これは知らない人がどの民族か分からないことから、当然と言える。どの年代もインドネシア語標準変種を選ぶ者が多く、高齢層で8割強、中年層で7割強、若年層で6割強という結果である。高齢層や中年層ではごく少数（2割弱）が選ぶマナド方言は、若年層では7人（26%）が選んでいることは小さな違いとして指摘できる。これはもっと上の世代と異なり、彼らのマナド方言に対する親和性が強かったり、マナド方言の威信や勢力が強くなってきたりしていることが原因だと考えられる。

5.4. 私的な領域：買い物をするときの言語使用

ここでは買い物という、生活に必須の活動をするときに選択される言語について考察する。まず、リルン市（Lirung）の一番大きな市場について説明をしておく。リルン市といっても小さな町である。市場に売っているものは生鮮・加工食料品と衣服・靴・かばんなどが主である。その他、電気製品、携帯電話、椅子などの小さな家具は売っているものの、大変小規模である。ほとんどがマナド市から船で運ばれてきた商品である。ここで商売をする人のうち、食料品以外を扱うものは、かなりの確率で中国系や他民族である。従って、タラウド人以外の人とやり取りをする可能性も高い。

項目Kでは、このリルン市で（つまりリルンのあるサリバブ島で）、一番大きな市場での使用言語を聞いた。高齢層では見事に回答がばらけている。タラウド語やmixed codeを用いるものがある一方で、インドネシア語標準変種はマナド方言を選択するものがある。これは売り手側にタラウド人も、異民族もいるからで、思い浮かべた状況によって回答が異なってくるのだろう。異民族は当然タラウド語を解さないの、インドネシア語標準変種あるいはマナド方言を使う必要がある。しかし売り手がタラウド人ならタラウド語かmixed codeのどちらかが使えるわけである。中年層はmixed codeを用いるものが一番多い。若年層ではmixed codeとマナド方言を選ぶものが同数である。いずれにしても、売り手側の多様性を反映した結果だと言える。

項目Lは「自分が居住する村内の店で買い物をするときに使用する言語」である。同じ村に存在する、タラウド人が経営している小規模な店（warung）を想定しての回答が期待できる。高齢層の多くがタラウド語を選択し、中年層はタラウド語とmixed code、若年層はmixed codeが最も多くタラウド語やマナド方言も用いるという結果になった。これは、異なる世代・同世代のタラウド人と話すときの使用言語を聞いた項目GとHの結果とほぼ同じであるのは当然であろう。

項目Mは「マナドで買い物をするときに使用する言語」を問うものである。Manadoは北スラウェシ州のみならず、中部・南部スラウェシやジャワ島からも移住者がいる州都であり、サリバブ島のように、マナドとの往復船便が州に2、3往復ある場所に住む者であれば、マナドに行くことはよくある。マナドに住む親戚や知人を訪ねたり、買い物や大規模病院で

の治療を目的とすることもある。従って、マナドでの買い物経験は、多くの人が持っている。当然のことながら、どの年齢層においてもマナドでの勢力の強い共通語、マナド方言を用いる者が最も多く、タラウド語を用いるものは皆無である。インドネシア語標準変種を用いるものも少数いる。mixed codeを選んだものも各年齢層に少しずつ存在するが、実際にタラウド語とマナド方言が混ざった変種を用いることがあるとは考えにくい。前節の項目J「知らない人と話すときの言語」ではインドネシア語標準変種が多かった。同じく知らない人を話し相手として想定しているとは言え、マナドという土地に行けば、(インドネシア語標準変種ではなく)マナド方言を話すのが自然だとタラウドの人々は感じているのである。

まとめると、年代による差異がはっきりするのは項目Lの、タラウド人の村の中の店における使用言語であった。タラウド語の使用割合は、年代が若くなるに従って減っていく。ただし、どの年齢層も、相手がタラウド人であればタラウド語ないしタラウド語とマナド方言のmixed codeを選択したいと思っているようである。

表4 私的な領域：買い物をするときに選択する言語

	高齢層 (17人) (1959年以前生)	中年層 (11人) (1959～1965年生)	若年層 (27人) (1966年以降生)
K. Lirun市の市場で	BT 5人 (80%) BM 4人 (13%) BI 3人 (18%) Cam 5人 (13%)	BT 2人 (18%) BM 1人 (9%) BI 1人 (9%) Cam 7人 (64%)	BT 2人 (7%) BM 12人 (44%) BI 1人 (4%) Cam 12人 (44%)
L. 居住する村・近所で買い物	BT 12人 (71%) BM 2人 (12%) BI 2人 (12%) Cam 3人 (18%)	BT 6人 (55%) BM 0人 (0%) BI 0人 (0%) Cam 5人 (45%)	BT 6人 (22%) BM 6人 (22%) BI 0人 (0%) Cam 15人 (56%)
M. Manadoの中心地で買い物	BT 0人 (0%) BM 11人 (65%) BI 3人 (18%) Cam 2人 (12%) その他1人 (6%)	BT 0人 (0%) BM 7人 (64%) BI 4人 (36%) Cam 0人 (0%)	BT 0人 (0%) BM 24人 (89%) BI 2人 (7%) Cam 1人 (4%)

以上、私的な領域における言語使用をまとめる。タラウド語の使用に関して、年代によるばらつきがほとんど無いのは、「知らない人と話すとき」や、「村以外の場所で買い物をするとき」である。つまり、親しみのある人間関係や居住空間を離れれば離れるほど、マナド方言やインドネシア語標準変種をよく用いるようになる。これに対し、親しい人間関係や居住地域においては年代による違いが激しくなる。高齢層がタラウド語を選択することが多いのに対し、若年層はmixed codeかマナド方言を使用する。中年層は両者の中間的な言語使用状況を示す。

5.5. 極私的な領域・自発的な言語使用

ここでは極私的な領域における言語使用をみる。表5に挙げたのは聞き手が話す言語に関与しない場面での言語使用である。項目Nは聞き手を想定せず、自分一人で祈るときに使用する言語である。既に述べたように、宗教に関する事柄は大変格式ばっており、H変種が好まれる。タラウド諸島においてもインドネシア語標準変種がH変種であり、教会や宗教儀式ではインドネシア語標準変種の使用が最も多い。どの年代でもインドネシア語標準変

種を用いるものが過半数を超えるが、自分の他に聴いている人がいないとしても宗教に関わる場ではH変種たるインドネシア語標準変種が選ばれることが分かる。

ただし、年代差がないわけではない。高齢層ではタラウド語を選択するものが3分の1程度いるのに対し、中年層では9割がインドネシア語を選択し、残りがmixed codeを選択する。高齢層と中年層の間には民族語の使用に関してかなりの違いがある。若年層でもほとんどがインドネシア語標準変種を使用するがマナド方言と答えたものも少数いるのは、表3、表4あたりでも見た傾向と一致する。若年層は他の年代に比べて、マナド方言をより威信の高いものと認識しているのだと解釈できる¹⁰⁾。

さて、項目O「言葉を使えない赤ん坊をあやすときに使用する言語」であるが、この場合は聞き手がいるもののまだ言葉を使えないわけであるから、使用言語の選択に関与しないはずである。つまり、話者が一番自然に用いることができる言語が出てくると考えられる。高齢層はタラウド語、若年層はマナド方言を用いる者が多い。中年層は両者の中間的な様相を呈する。

ここに中年層、若年層と年代が若くなるに従って、話者がタラウド語を第一言語として習得しておらず、マナド方言を第一言語として習得する傾向が強く見られる。ただし、若年層においてもmixed codeやタラウド語を用いる者が若干いることから、タラウド語も同時に使用しているのだと推測できる。

項目P「お金やものを数えるときの使用言語」に関しては、上述の項目Nと非常に似通った傾向が見られる。どの年代においてもインドネシア語標準変種を使用するものが多い。高齢層にはタラウド語を用いる者もいるが、中年層と若年層にはmixed codeの使用者しかいない。学校教育において計算はすべてインドネシア語標準変種でなされることから、特に聞き手を想定しない場合でも数がからむとインドネシア語標準変種を用いることが多いのであろう。

表5 極私的な領域：聞き手の言語が関係しない場合

	高齢層 (17人) (1959年以前生)	中年層 (11人) (1959～1965年生)	若年層 (27人) (1966年以降生)
N. 一人で祈るとき に使う言語	BT 6人 (35%) BM 0人 (0%) BI 9人 (53%) Cam 3人 (11%) BTとBIの重複回答 1人	BT 0人 (0%) BM 0人 (0%) BI 10人 (91%) Cam 1人 (9%)	BT 1人 (4%) BM 3人 (11%) BI 19人 (70%) Cam 3人 (11%) 無回答 1人 (4%)
O. まだ言葉を使えない子供をあや すときに使う言語	BT 11人 (65%) BM 2人 (12%) BI 1人 (6%) Cam 2人 (12%) BTとBMの重複回答 1人	BT 0人 (9%) BM 5人 (45%) BI 4人 (36%) Cam 2人 (18%)	BT 1人 (4%) BM 16人 (59%) BI 3人 (11%) Cam 6人 (22%)
P. お金や物を数えるときに使う言語	BT 3人 (18%) BM 1人 (6%) BI 10人 (59%) Cam 3人 (18%)	BT 0人 (0%) BM 1人 (9%) BI 9人 (82%) Cam 1人 (9%)	BT 0人 (0%) BM 3人 (11%) BI 19人 (70%) Cam 5人 (19%)

表6に挙げた項目QからTの四つの項目は咄嗟に使用する言語を回答してもらうことを意図したものである。項目Q「からかったり冗談を言う」場合は、リラックスした状態で自然に出てくる、あるいは一番使いやすい言語が選択されると思われる。項目Rは「重要なことを真剣に話す」場合で、あまり精神的に余裕が無い状態、項目Sは「怒った状態」で、共に一番得意な言語が出て来やすいと思われる。項目T「口論する」場合は、聞き手の発話に返す必要があるのでコミュニケーションの双方向性が一番強く、聞き手の使用言語が言語選択に一番大きな影響を与えると思われるが、自分の立場・考えを瞬時にまとめて聞き手に投げつける必要がある場合なので、やはり一番得意な言語が出て来やすいと思われる。

これらの項目は、それぞれ差異はあるものの、Q、S、Tの三つの項目には良く似た傾向が見られる。どの年齢層もmixed codeを選ぶ者が一定の程度、4割から9割いる。タラウド語を選択する者は高齢層で2割から3割、中年層と若年層ではそれよりも少ない割合で、この傾向は項目I「親しい友人と話すときの言語」とほぼ同じである。聞き手の解する言語が、使用言語の選択に影響を与えるという意味では同じだからだろう。

高齢層において、タラウド語を選択する者が比較的少なく、mixed codeを用いると答える割合の方が高いのは、筆者の観察からは、より実態に即していると言える。タラウド人同士がタラウド語で話しているときにもマナド方言は混じるし、何らかのきっかけでマナド方言に切り替わることがよくある。

高齢層は、上の世代の家族（項目A「父親に対して」とB「母親に対して」）や同世代の家族（項目C「兄弟に対して」、項目D「配偶者に対して」）にはタラウド語を用いる。また親しいタラウド人の人々に対しても用いる（項目G「タラウド人年下の世代に対して」とH「タラウド人同世代に対して」）。つまり、よく知った関係のタラウド人、つまりDorian 1981の言うprimary relationに対してはタラウド語を使うという意識がある。しかし、実際に「冗談を言うとき」「口論するとき」などの場面を与えると、「mixed codeを用いる」とより実態に即して答えるのではないだろうか。高齢層が同世代以上のタラウド人に対してタラウド語を主に用いるのは事実としても、下の世代の者に対してはmixed codeを用いることが多いと筆者の観察からは言える。

若年層は、項目Q、S、Tのどの場面においても一定の数（4人（15%）から7人（26%））がマナド方言を選択すると答えているが、高齢層や中年層に比べて高い割合である。マナド方言への移行が進んでいることが伺える。中年層はマナド方言を選択するものがほとんどいない。mixed codeを選択するものが多く、その割合は高齢層と若年層の中間の傾向を示す。

項目R「重要なときに真剣に話す言語」に関しては、インドネシア語標準変種を選択する者がどの年齢層にも一定の割合でいる。中年層ではインドネシア語標準変種を選択するものが7割と最も多く、高齢層でも4割くらい、若年層では2割5分ほどが選択する。高齢層は、タラウド語とmixed codeを選択するが、若年層ではmixed codeを選択するものが一番多く（44%）マナド方言とタラウド語を選択するものが同数である。

このことから、「重要なときに真剣に話すとき」という、親しい関係にある相手であってもより改まった場面になると、インドネシア語標準変種を選択するものが増えることが分かる。

表6 極私的な領域：聞き手の言語が関係するが、母語あるいは一番得意な言語を使用すると思われる場面

	高齢層 (17 人) (1959 年以前生)	中年層 (11 人) (1959～1965 年生)	若年層 (27 人) (1966 年以降生)
Q. からかったり冗談を言うときに使う言語	BT 4 人 (24%) BM 3 人 (18%) BI 1 人 (6%) Cam 9 人 (53%)	BT 2 人 (18%) BM 0 人 (0%) BI 0 人 (0%) Cam 9 人 (82%)	BT 4 人 (15%) BM 6 人 (22%) BI 1 人 (4%) Cam 16 人 (59%)
R. 重要なことを真剣に話すときに使う言語	BT 5 人 (29%) BM 0 人 (0%) BI 7 人 (41%) Cam 5 人 (29%)	BT 2 人 (18%) BM 0 人 (0%) BI 8 人 (73%) Cam 1 人 (9%)	BT 4 人 (15%) BM 4 人 (15%) BI 7 人 (26%) Cam 12 人 (44%)
S. 怒っているときに使う言語	BT 6 人 (35%) BM 0 人 (0%) BI 3 人 (18%) Cam 9 人 (53%)	BT 0 人 (0%) BM 0 人 (0%) BI 1 人 (9%) Cam 10 人 (91%)	BT 3 人 (11%) BM 6 人 (22%) BI 0 人 (0%) Cam 17 人 (63%) (1 人が無回答)
T. 口論するときに使う言語	BT 6 人 (35%) BM 2 人 (12%) BI 3 人 (18%) Cam 8 人 (47%) (うち 1 人が BT と BM の重複回答)	BT 1 人 (9%) BM 1 人 (9%) BI 0 人 (0%) Cam 9 人 (82%)	BT 6 人 (22%) BM 7 人 (26%) BI 0 人 (0%) Cam 14 人 (52%)

5.6. 公的な領域における言語使用

次に、表7の公的な領域における言語使用を見てみよう。項目Uでは学校という公的な領域ではあるものの、友達に対して用いる言語、項目Vでは同じく公的領域の学校において先生に対して用いる言語を問うた。より改まった領域の項目Vでは年代によるばらつきが見られない。年代を問わずほとんどの人がインドネシア語標準変種を選択する。高齢層と中年層ではmixed codeを選択するものが少数おり、高齢層においてはタラウド語を選択する者がいた。若年層ではマナド方言を選択するものが少数派であるが存在する。他の年齢層ではマナド方言を選択する者はいない。このことから、公的で改まった聞き手に対してはインドネシア語標準変種が選択されること、その次に用いられやすい変種は高齢層ではタラウド語ないしmixed codeであり、中年層ではmixed code、若年層ではmixed codeに加えてマナド方言であることが分かる。ここでも若年層においてマナド方言の威信が上昇しているのではないかと推察される。

しかし、項目U「休み時間に友達と用いる言語」に関しては各年齢層において回答がばらけている。高齢層と中年層ではタラウド語、インドネシア語標準変種、mixed codeを同数程度、若年層ではタラウド語、マナド方言、mixed codeを同数程度選択している。聞き手および話題によって様々な変種が選ばれていることが推察できる。

項目Wの役所で使用する言語、項目Xの宗教集会で使用する言語に関しては、年代を問わず、ほぼ同じ傾向が見られる。項目Vの「学校で先生に使用する言語」とも同じ傾向である。最も多くの人間がインドネシア語標準変種を選択する。高齢層と中年層では少数がmixed codeやタラウド語を選択するが、若年層ではmixed codeに加えてマナド方言を選択

する者もいる。項目 W の宗教集会は各地域ごとに行うので、参加者が全員タラウド人であることも珍しくない。しかし、インドネシア語標準変種が第一に選ばれる。

以上をまとめると、公的な領域においてはほぼインドネシア語標準変種が最も使用される。学校という公的な領域ではあるものの、休み時間という公的な性質が失われた場で親しい仲の者に対しては mixed code やタラウド語、マナド方言が選択されることもある。学校で先生に対して（項目 V）、役所（項目 W）、宗教集会（項目 X）では年代による大きな差は認められない。どの年齢層でも mixed code を選ぶものが多い一方、若年層で若干マナド方言を選択するものがあるというくらいである。

表7 公的な領域における言語使用

	高齢層（17人） （1959年以前生）	中年層（11人） （1959～1965年生）	若年層（27人） （1966年以降生）
U. 学校で休み時間に 友達に使う言語	BT 5人（29%） BM 3人（18%） BI 4人（24%） Cam 5人（29%）	BT 3人（27%） BM 1人（9%） BI 3人（27%） Cam 3人（27%） （うち1人が無回答）	BT 7人（26%） BM 8人（30%） BI 3人（11%） Cam 9人（33%）
V. 学校で先生に使う 言語	BT 2人（12%） BM 0人（0%） BI 13人（76%） Cam 3人（18%） （うち1人がBTと BIの重複回答）	BT 0人（0%） BM 0人（0%） BI 9人（82%） Cam 1人（9%） （うち1人が無回答）	BT 0人（0%） BM 3人（11%） BI 21人（78%） Cam 3人（11%）
W. 役所で仕事上の役 人に使う言語	BT 0人（0%） BM 2人（12%） BI 13人（76%） Cam 3人（18%） （うち1人がBMと BIの重複回答）	BT 0人（8%） BM 0人（8%） BI 9人（82%） Cam 2人（18%）	BT 0人（0%） BM 5人（19%） BI 19人（70%） Cam 3人（11%）
X. Ibadah（宗教集 会）で説教をする とき	BT 1人（6%） BM 0人（0%） BI 14人（82%） Cam 4人（24%） （うち1人がBTと BIの重複回答）	BT 0人（0%） BM 0人（0%） BI 9人（82%） Cam 2人（18%）	BT 0人（0%） BM 3人（11%） BI 20人（74%） Cam 5人（19%）

5.7. 言語意識と言語使用

以上、タラウド人の言語使用状況を私的な領域、極私的な領域、そして公的な領域に分けて述べてきた。最後に年代ごとの言語意識を問う項目を表8に示す。項目aは「何語で話すのが一番心地よいか」で、話者が一番リラックスして自然に発話できる言語が選ばれるはずの項目である。項目bは「一番得意な言語」を問うもので、その回答は項目aの回答と一致するはずである。

しかし、予測に反して、項目aとbはどの年齢層においても微妙に異なっている。その理由はよく分からない。ただし、項目b「一番得意な言語」でインドネシア語標準変種を選択した者については、自らの学識の高さを示したのではないかと推察できる。H変種であ

り書記言語であるインドネシア語標準変種を操る能力は教育程度と比例するからである。高齢層は両項目 a についてタラウド語を選択する者が一番多かった。中年層も半数程度がタラウド語を選択している。

若年層は両項目ともタラウド語と mixed code のどちらかを撰んだ者が多い。筆者の観察では、若年層はタラウド語の知識が不十分である。例えば筆者の調査時に若者（40 代前半以下）が居合わせた場合、彼らの答えるタラウド語は頻繁に高齢層によって訂正されることが示すように、彼らは発音、形態、統語、意味の各側面において不十分な知識を露呈する。それなのに、項目 b 「一番得意な言語」でタラウド語を選んだものが半数近くいるのは注目しに値する。若年層のタラウド語使用率は実際の会話においては低く、タラウド語を用いていると自身が認識していても実際には mixed code であることが多い。従って、あまり用法に自信の持てない表現は用いないであろうし、実際の会話においては高齢層が逐一間違いを指摘することはない。従って、実際にはそれほどタラウド語が流暢ではない若年層も自らの民族の言語だからという理由で、「得意」だと思い込んでいる可能性がある。

項目 c の「一番良く使う言語」に関しては、高齢層と中年層がタラウド語とインドネシア語標準変種をほぼ同数が選ぶのに対して、若年層ではマナド方言が一番多くの者に選択されている。今まで見てきた項目では、若年層のマナド方言の使用が他の年齢層に比べて多く、マナド方言の威信がより高いと認識していることが推察されるが、その傾向がここでも見られる。

項目 d 「一番好きな言語」を問う項目については、全ての年齢層において、タラウド語を選択するものが一番多い。しかしどの年齢層でもインドネシア語標準変種やマナド方言を選ぶ者が若干名いる。インドネシア語標準変種は上記のように自らの教育程度の表れとなるから、マナド方言は実際によく使用しており特に若年層は第一言語として習得しているから、

表 8 各年代の Bantik 族の言語意識

	高齢層 (17 人) (1959 年以前生)	中年層 (11 人) (1959～1965 年生)	若年層 (27 人) (1966 年以降生)
a. 何語で話すのが 一番心地良いか	BT 8 人 (47%) BM 0 人 (0%) BI 3 人 (18%) Cam 5 人 (29%)	BT 5 人 (45%) BM 2 人 (18%) BI 2 人 (18%) Cam 2 人 (18%)	BT 8 人 (30%) BM 4 人 (15%) BI 2 人 (7%) Cam 13 人 (48%)
b. 一番得意な言語	BT 13 人 (76%) BM 0 人 (0%) BI 4 人 (24%) その他 0 人 (0%)	BT 5 人 (45%) BM 1 人 (9%) BI 5 人 (45%) その他 0 人 (0%)	BT 13 人 (48%) BM 7 人 (26%) BI 7 人 (26%) その他 0 人 (0%)
c. 一番良く使う言語	BT 8 人 (47%) BM 2 人 (6%) BI 7 人 (41%) Cam 0 人 (0%)	BT 5 人 (45%) BM 2 人 (18%) BI 4 人 (36%) Cam 0 人 (0%)	BT 9 人 (33%) BM 12 人 (44%) BI 6 人 (22%) Cam 0 人 (0%)
d. 一番好きな言語	BT 9 人 (53%) BM 1 人 (6%) BI 3 人 (18%) Cam 1 人 (6%)	BT 6 人 (22%) BM 2 人 (18%) BI 2 人 (18%) Cam 1 人 (9%)	BT 11 人 (41%) BM 4 人 (15%) BI 6 人 (22%) Cam 6 人 (22%)

それぞれ選ばれているのだと考えられる。

ただし、どの年齢層でもタラウド語を選択する者が一番多いことから、民族語に対する愛着は受け継がれていると思われる。

6. まとめ：タラウド語使用地域の言語使用と言語意識

タラウド語は、北スラウェシ州の他の民族語と同様、絶滅の危機にある。質問票の結果からはあまり明らかにならなかったが、若年層のタラウド語能力は概して semi-speaker、あるいは passive-speaker のレベルである。理解はある程度でき、単語もある程度知ってはいるものの、インドネシア語に存在しない音素に関しては用いることができない者が多い¹¹⁾。文法に関しては、タラウド語に存在する二つの Undergoer Voice (受動態)¹²⁾の使い分けは困難である。インドネシア語標準変種には一つの Undergoer Voice しかないが、その影響を受けていることは明らかである。

若年層へのタラウド語の伝達は限られている。本調査では、1965 年以降生まれの者のうち、1975 年以降生まれの者は 6 名いるが、このうちタラウド語が一番得意とした者は 1 名 (1976 年生まれ) である。もし 1980 年以降に生まれたものを調査すれば、ほぼ全員がマナド方言ないしインドネシア語標準変種を一番得意と認識しているというデータが取れるだろうと思われる。1975 年以降生まれの者は 6 名のうち「一番好きな言語」ではタラウド語を 2 名が選択している。残り 2 名ずつがインドネシア語標準変種とマナド方言を選択している。ここではある程度自らの民族語を大切に思っているが、実際に使用しているマナド方言や権威のあるインドネシア語標準変種へと心情的にも移行している様子が見て取れる。

この点は、内海 2010 におけるバンティック語話者の調査結果とかなり異なっている。バンティック語話者は、1980 年以降生まれの若年層はほとんどバンティック語能力を持たないが、それでも一番好きな言語としてバンティック語を挙げていた。これはバンティック語使用地域ではマナド方言の勢力がもっと強く、他民族の流入も激しいことから、民族語の保全をしていきたい気持ちが強くなるのではないかと推察する。タラウド語では、それほどマナド方言の脅威が感じられないのではないだろうか。

言語使用領域に関するアンケート調査の結果からは、公的な領域や改まった場で用いる言語変種は H 変種のインドネシア語標準変種であり、年代による差が少ないことが明らかになった。私的な領域においても、買い物や友人関係においては聞き手の使用言語が言語選択の一番大きな要素となるので、話者自身の選択の余地はあまりない。

しかし、親しいタラウド人が聞き手となる場合や家庭においては、話者のある程度主体的な選択が行われうる。家庭では高齢層は相手がタラウド語を使用する者が一番多く、若年層では一番少ない。中年層はその中間である。また、どの年齢層においても私的な領域で mixed code を選ぶ者が多い。この結果を信じるならば 1980 年以降生まれの者はともかく、比較的若い世代でも全くタラウド語を混ぜずに話すことは少ないようだ。

内海 2010 において報告したバンティック語話者とタラウド語話者の違いを以下に述べる。第一に、タラウド語話者の方が mixed code を選択する割合が多く場面において多かった。第二に、それほど改まった場ではない、私的な買い物などの場面においてもインドネシア語

標準変種を選択する者が多い。タラウド語地域ではマナド方言が広がっているとは言え、マナド市からは100キロ以上遠く海で隔たっており、週3便ほど往復する船で14時間ないし16時間もかかることから、その勢力はあまり強いと認識されていないのだろう。一方、バンティック語話者地域は、マナド市のベッドタウンとなっており、30分から1時間でマナド市に通える場所である。

しかし、タラウド語話者地域においても、気の置けない会話ではマナド方言形¹³⁾が多用され、若年層ではマナド方言第一言語になりつつあることは確かである。その理由として、第一にインドネシア語標準変種は学校で使用しており、テレビ放送でもインドネシア語が聞かれることによりインドネシア語の変種の一つであるマナド方言への親和性が高まっていること、第二に教育や職業の機会を求めてタラウド人が頻繁にマナド市と往復することが挙げられる。

以上をまとめると、タラウド語使用地域においては、H変種たるインドネシア語標準変種とL変種たるマナド方言の使用が確実に増加しており、若年層においては特に著しい。若年層においては、マナド方言の威信がより高く感じられるようになっていることも推察される。タラウド語に対する言語意識とタラウド語の使用実態がどのように変化するか、今後も観察が続けられることが望ましい。

参考文献

- Dorian, Nancy. 1981. *Language Death: the Life Cycle of a Scottish Gaelic Dialect*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 平林輝夫. 2003. 『北スラウェシ州・ミナハサ地方・トンサワン語の選択と語彙集』, (*Endangered Languages of the Pacific Rim 2003 A3-015*). 大阪: 大阪学院大学.
- Noorduyn, J. 1991. *A critical survey of studies on the languages of Sulawesi*. Leiden: KITLV Press.
- Quakenbush, J. Stephen. 2009. 'Tracking Agutaynen Language Vitality: 1984-2009'. Paper for presentation at 11th ICAL, Aussois, France.
- Sneddon, James N. 1984. *Proto-Sangiric and the Sangiric languages*. Canberra: Pacific linguistics series B, No. 91.
- 内海敦子 2010. 「インドネシアにおける地域語・民族語の使用実態—Bantik 語の事例を中心に—」『明星大学研究紀要—日本文化学部—言語文化学科』第十八号 pp. 205-234.

注

- 1) 語源的にはTalaudのtaの部分は「人」、laudは明らかに「海」を表す（オーストロネシア祖語ではlaSudと再建されている。インドネシア語においてはlaut）。ただし、タラウド語話者による自称、taroddaの後半部分、roddaだけでは、タラウド語においては「海」を意味しない。タラウド語の「海」はtaharoanggaである。roanggaの部分は祖語におけるlaSudが変化した部分と考えられるが、tahaの部分に関しては祖語との対照を今後考察していく必要がある。
- 2) 北スラウェシの人々はおおむね他地域からの他民族の流入に対しておおらかである。オランダ支配の影響が強く、他民族の受け入れに慣れてきているから寛容なのではないかと推察される。
- 3) オランダ人宣教師でインドネシア諸語の語彙を収集したHolleによるHolle ListにはLirungの地名の下に語彙が収集されているが、Lirungで話されている言語ではない。出版の際になんらかの混乱があったものと考え

- られる。
- 4) カラケラン島にはタラウド諸島の中心都市メロンワネ市があるが、その周辺ではサリバブ方言とはほぼ同じ変種が話されている。
 - 5) このNanusa方言に関してはごく限られた調査を筆者が行った。他の変種はすべての語が開音節で終わる特徴を有しているが、Nanusa方言には、閉音節で終わる語も多く存在する。語彙の面でも、Nanusa方言は他の方言とかなり異なっているようである。
 - 6) この点は、内海2010で報告したバンティック族の状況とはかなり異なっている。バンティック族においては高齢層はバンティック族の両親を持つ者がほとんどであったのに対し、若年層においては両親のどちらか一方がバンティック族でない者がほとんどであった。また、中年層においては半数以上がバンティック族以外と結婚していた。
 - 7) 今回のタラウド人の調査票には、両親ともサギル出身者であるがずっとタラウド（のサリバブ島）に住んでいた者も答えている。この話者のデータは本論文のデータからは除いたが、この話者は両親ともサギル人であるにも関わらず、生まれてからずっとタラウドに住み、タラウド人の配偶者を得ているため、自らをタラウド人と認識しているようであった。このように、民族意識はかなり流動的であり、個人によっても基準が異なるようである。
 - 8) ナヌサ諸島はフィリピン国ミンダナオ島の南からごく近いところにある。
 - 9) 内海2010では、同じ調査票に基づいてバンティック語話者の言語使用実態と言語意識を考察した。本論文は、そのタラウド語話者版である。
 - 10) 同様の現象はバンティック族の調査結果からも分かる（内海2010）。確実にマナド方言の威信は高まっており、インドネシア語標準変種と比べて著しく劣っていると感じるものは減っている。
 - 11) 例えばタラウド語には alveolar retrorlex fricative~approximant の /z/、trill の /r/、flap の /r/、lateral の /l/ があるが、インドネシア語に存在しない /z/ と /r/ に関しては存在することに気づかない若者も多く、/z/ は /r/、/r/ は /l/ と発音することが多い。
 - 12) タラウド語には二つの Undergoer Voice（受動態）があり、GOAL, PATIENT, LOCATION が主語となったときに動詞が Goal Voice を取り、INSTRUMENT, CONVEYED THEME が主語となったときに動詞が Conveyance Voice を取る。
 - 13) 内海2010でも述べたがマナド方言には独自の人称代名詞の体系や否定辞、談話的役割を果たす小辞を持つ。これらはインドネシア語標準変種に現れないので、改まった場では聞かれないが、タラウド人同士の会話では頻繁に用いられるので、彼らがマナド方言を使用しているという観察が可能になる。